

日本の英語教育が直面する問題点の検討
—『すばらしい新世界』における教育的要素の分析を参考に—

国際教養学部 教養学系
学籍番号 210072
氏名 一 優真
指導教員 加藤 千博

昨今のグローバル化を受け、英語運用スキルの要求が高まる日本では、英語学習の開始学年や授業内に見られる指導アプローチに変化が生じている。文部科学省によって2017年に小学校、中学校の学習指導要領が改定されると、小学校では外国語活動、外国語科の開始学年が繰り上げられ、中学校では全面的に英語を使用した、いわゆるオール・イングリッシュでの授業展開が推奨されるようになった。しかしながら、文部科学省（2024）の調査を参照するとこれらの変化は、外国語運用能力の国際基準であるCEFRにおけるA2レベル相当以上の中学生、高校生を増加させた一方で、B1レベル相当以上の高校生を減少させた要因であるとも伺える。この統計から、現在の日本の英語教育が生徒の英語運用能力を強化するために十分なものであるとは言い難い。

そこで本論文では、日本の英語教育の改善を主題とした。目的は、オルダス・ハクスリーの代表的なディストピア作品の一つである『すばらしい新世界』を、教育的な観点から分析し、分析結果を現代の日本の英語教育と照らし合わせ、今日の日本の英語教育が孕む問題点を明らかにすることである。研究を行う上で、まず政府の刊行物や研究論文を用いた日本の英語教育についての分析を、次に教育的観点からの『すばらしい新世界』の分析を行い、最後に両者の分析結果の比較考察を行った。

第1章では、はじめにカリキュラムと教育理念の観点から日本の英語教育の分析を行い、「外国語＝英語」というステレオタイプが生徒の中に生まれる可能性や、小学校と中学校の間に見られる学習内容のレベルの違いが生徒に与える負担、さらに外国語科における生徒の人間性育成の限界について論じた。次に、文部科学省の推奨する個別最適な学びの達成度に関して、学習の個性化の面から検討した。その結果、子どもたちの趣向に寄り添った学習方法の整備が推し進められている一方で、キャリア形成の面では未だ個性化が行き届いておらず、学習と実生活との一層の関係性強化が求められると推察した。最後に、英語教育における教科書の記載内容や使用方法について確認した。ここでは、戦争等の国際事件の話題について日本人の目線のみからの記述がされており、その局所的な観点からの捉え方が生徒の国際観に悪影響を与えかねないという問題性を示した。加えて、教科書内で扱われている文法事項が1958年以来の言語材料の影響を受けた学年卒の統制を

受けていることも問題点として指摘した。

第2章では、『すばらしい新世界』に登場する睡眠教育と条件反射教育を参考に、作中の社会に敷かれた教育理念を考察した。その結果、世界国家にとっての理想の人間へと画一的に成長させることや、一生涯にわたって人々に対し強大な統制力を発揮することが作中の教育理念であると示した。また個性の抑圧に関連する諸制度が人々に与える教育的影響として、自己成長の妨害や上昇志向、日常的な学習意欲の醸成の阻害が考えられると論じた。ことわざや新聞紙を用いた言語的統制については、人々の言語情報に対する過度な信頼の育成と彼らのメタ言語の統制に加え、作中の社会制度における下位階級の人々の識字能力の抑圧が教育的な悪影響であると分析した。

第3章では、カリキュラムと教育理念の面から日本の英語教育と『すばらしい新世界』の分析結果とを照らし合わせ、「外国語＝英語」という偏見を推し進めうる点に管理主義的な性格が伺え、問題であると指摘した。一方で、日本の英語教育の教育理念は本作品に反した人間主義的な志向のもとに構築されており、評価できるものであるとした。次に、個別最適な学びと個性の抑圧に関する諸制度の教育的影響とを比較し、習熟度別クラスは生徒の上昇志向や学習意欲を抑圧、停滞させ得る側面があると指摘した。また、授業内で生徒への足場的な支援を設けるアプローチについては、学習中に生徒たちが抱える葛藤を有効に活用し自己成長へと繋げ得る点で、個別最適化に効果的なものであると評価した。最後に、言語的統制の教育的分析を参考に日本の英語教育における教科書に関する問題点を検討し、国際的事象に対して日本人目線からの記載しかされていない点が問題点であると示した。さらに、言語材料が影響を与えていると伺える文法の学年枠が、コミュニケーションを前提とした生徒の思考力の養成を妨げている点が問題点であると論じた。

結論として第一に、外国語科という名称のもとで学習言語を原則的に英語とすることが、「外国語＝英語」というステレオタイプを子どもたちに生じさせかねない点で問題であるといえる。第二に、習熟度別クラスでの指導は、一部学習の個性化を促進させる効果が認められる一方、上位生徒との交流を断たれることから、上位クラスへの憧れや競争心のきっかけを掴みづらと考えられ、問題性が伺える。第三に、外国語科という子どもたちの国際理解を促進する強化であるにもかかわらず、戦争等の国際事件についての記載が日本人の目線に偏ってしまっていることが問題点である。そして第四に、学年枠による文法事項の配置が、英語コミュニケーションを念頭においた思考力養成のための教科書としては不適切であると考えられ、問題性を孕んでいるといえる。本論文は、文学作品に登場する教育的要素と、現実世界の教育とを照らし合わせ問題点を指摘するという、フィクションとノンフィクションを融合するようなアプローチを開拓し、研究を行ったことに意義がある。

映画『日の名残り』におけるスティーブンスの心情の曖昧さの再現性
—ミス・ケントンとの関係性に着目して—

国際教養学部 教養学系

学籍番号 210096

氏名 久野 華子

指導教員 加藤 千博

『日の名残り』は、1989年にイギリスの小説家カズオ・イシグロによって執筆された小説であり、その4年後に映画化され、小説、映画共に高い評価を受けて広く親しまれている。文学界では、主人公スティーブンスの、小説における信頼できない語りについて、数多くの先行研究がなされてきた。しかしながら、小説同様に映画も高く評価されているにもかかわらず、映画に関する研究は少なく、映画において小説の技法がどのように再現されているのかという点についてはまだ議論の余地があると考えられる。そこで本稿では、小説において信頼できない語りによって描写される心情の曖昧さの映画での再現性を主題とし、小説『日の名残り』においてスティーブンスの信頼できない語りによって表現される心情の曖昧さが、映画ではどのように受容、再現されているのかを明らかにすることを目的とした。また、信頼できない語りの技法が、スティーブンスのミス・ケントンに対する心情の曖昧さを表現していることを踏まえ、二人の関係性に焦点を当てた。研究手法としては、まずは先行研究などの文献やインタビューなどの動画資料を基に、小説と映画の分析をそれぞれ行った。そして、それらの分析結果をもとに、小説での表現技法が映画で再現されているかを検証した。

第1章では小説を分析した。まず人物像については、スティーブンスは執事としての品格を守るために感情や本心を抑圧し、他人と向き合うことに臆病な人物であること、対照的にミス・ケントンは感情表現豊かで自分の意思で判断を下し、他者との関わりを大切にしている人物であることを示した。次に、構造分析では過去と現在を交互に描く構造が、回想で語られる過去の出来事がスティーブンスにとって重要なものであり、彼が過去に囚われていることを示す効果があることを明らかにした。そして、二人の関係性についてはミス・ケントンからの手紙や回想中の出来事、再会の場面などに着目して両者の心情を分析し、互いに恋愛感情を抱いていたことを指摘した。

第2章では映画を分析した。最初に人物像を確認し、表現方法は違っているが、スティーブンスとミス・ケントンの両者とも、小説と同様の人物像が役者の演技から読み取れることを明らかにした。次に構造分析を行い、小説における回想と現在を交互に描く構造が、映画ではどう表現されているのかを確認した。手紙のナレーションや車の運転が回想

のきっかけとなっていること、映像技法や音楽に工夫がなされていることを指摘し、映画においても過去場面はスティーブンスの回想であることを明らかにした。最後に、二人の関係性を考察した。二人の会話や表情などの視覚的要素に着目して相手への心情が読み取れる箇所を指摘し、二人の間に恋愛感情があったことを示した。

第3章では第1章、第2章で行った小説と映画の分析内容を基に、以下の三点について映画においても小説と同様の解釈ができるかどうかを検証した。一点目は、ミス・ケントンからの手紙にあった彼女のダーリントン・ホールへの復帰の意思は、スティーブンスの思い込みであるという点である。手紙がスティーブンスの回想へのきっかけになっていること、手紙の文面が映像で映し出されないことを指摘し、映画においても彼女の復帰はスティーブンスの願望が投影された思い込みであると解釈できることを示した。二点目は、ミス・ケントンが結婚を報告した日に本心を伝えなかったことへの後悔を認めず、自己正当化をしていることである。スティーブンスの表情が映し出されないこと、ストーリーにアレンジが加えられていることなどを指摘し、映画においても彼が本心では後悔していることを隠していることを確認した。三点目は、スティーブンスはミス・ケントンとの恋愛に向き合えなかったことを強く後悔していながらも、最後までそれを内に秘めているという点である。再会の場面は彼の回想であることを示し、彼の表情が見えないこと、ストーリーのアレンジなどの工夫がされていることから、映画でも同様の解釈ができると論じた。

以上のように、本稿ではスティーブンスとミス・ケントンの関係性に焦点を当て、小説で描かれる彼の心情の曖昧さが、映画でも再現されているかを検討した。そして、映画においても過去の出来事は回想であるという解釈が可能であること、画面の構図やストーリーのアレンジによってスティーブンスの内面が表されていることを明らかにした。これらを踏まえ、ミス・ケントンの復帰の意思はスティーブンスの願望による思い込みであったこと、ミス・ケントンの結婚報告の日の自身の選択を正当化していたこと、恋愛に向き合えなかったことを深く悔やみながらも、それを最後まで胸中に留めていたことが映画からも読み取れることを示した。以上のことから、小説における信頼できない語りによって生じるスティーブンスのミス・ケントンへの心情の曖昧さは、映画でも再現されていると結論付けた。本稿の意義は、これまで十分に論じられていなかった「信頼できない語り手の再現性」という観点から映画を分析し、映画でもスティーブンスの心情の曖昧性が再現できるという見解を示したことである。

『説得』に描かれる新しい女性像
—話法の分析をもとに—

国際教養学部 教養学系
学籍番号 210118
氏名 佐々木 ひいろ
指導教員 加藤 千博

ジェイン・オースティンの『説得』(1818)は、八年前の恋人であったウェントワースとの再会により恋心を取り戻す主人公アンを描いた物語である。彼女の人物像として、冷静で落ち着いた側面が先行研究で着目され、フェミニズム的観点で多く論じられてきた。しかし作品内では彼女の感情的な一面も多く描かれており、相反した二つの要素が共存した性格が浮かび上がる。この点についてフェミニズムの観点から考察した研究は少なく、批評する価値があると考えられる。そこで本論では、アンの人物像を分析することで、『説得』においてどのような新しい女性像が描かれたのかを提案することを主題とする。また、先行研究では十分に指摘されなかったアンの人物像の二面性に着目し、アンの本質を探ることを本論文の目的とする。研究方法としては、話法の分析を通じて、アンの他者との関わり方や内面がどのように描かれ、どのように人物像が形成されているのかを考察する。

第1章では、『説得』におけるフェミニズム的主張を整理するため、先行研究を批判的に検討した。まず、作品が書かれた当時の女性たちに求められた生き方と女性運動家の主張について整理し、それぞれをアンの性格や行動様式と比べた。そして、アンは男女不平等的な当時の慣習を受け入れながらも、先進的な女性像との類似も認められた。次に、オースティンの結婚に関する倫理観を確認した。ここでは、オースティンが女性の結婚において愛情を第一条件とした上で、相手の男性の経済的状況も条件として考えるべきだという倫理観を持っていることがわかった。最後に、『説得』に関するフェミニズム批評の先行研究を整理した。『説得』では、社会的・教育的な男女不平等がアン自身の発言から指摘されていたり、彼女がそういった慣習を認識し柔軟にすり抜ける様子が描かれたりしていることが明らかになった。

第2章では、アンの発言や思考の描写に用いられる話法に着目して、アンの人物像がどのように描かれているのかを分析した。その結果、作品冒頭から最終部分にかけて描かれるアンの人物像が変容していることが確認できた。作品冒頭では、アンの発言はほとんど直接話法で描かれることはなく、印象の薄さが与えられていた。しかし、作品中盤部分に物語が進むと、徐々にアンの発言が多く抽出されるようになり、冷静かつ穏やかな主張と

的確な判断力が描かれ、冒頭部分のアンの人物像からの変化が見られる。それと同時に、激しい感情の揺さぶりが自由間接話法により描かれていることから、彼女の理性的な一面と非理性的な一面が混在する人物像が明らかになった。最後に、終盤部分ではアンがウェントワースに間接的に告白する場面が描かれ、彼女の自主性と柔軟さが証明された。

第3章では、第2章で分析した結果をもとに、アンの人物像の冷静な一面と感情的な一面を整理し、彼女の人物像と作品のフェミニズム的主張との関わりを示した。まず、アンは周りの人々と関わる中で冷静さを見せることができることが明らかになった。しかし、ウェントワースの恋愛事情や心情を予想するアンの思考は、語り手が客観的な情報を排除することで主観的に描かれ、冷静な人物像は必ずしも常に前面に押し出されて描かれているとは言えないことを指摘した。次に、アンの激しい感情の揺さぶりが描かれる場面について考察した。アンはウェントワースが同じ空間に存在することで感情を高ぶらせており、それは、結婚において愛情を重要視したロマンチストであるオースティンが、恋愛感情の描写を高く評価したからであると解釈を示した。最後に、アンはその激しい感情の揺さぶりをどのように対処しているかを分析した。彼女は、周りとの距離を置き、精神的な孤独を得ることで感情を落ち着かせていることを指摘した。こういった感情をコントロールする姿は、周りの人たちの秩序を守るという点で、当時の女性たちに求められた行動様式と類似している。こうして感情を制御するという方法で当時の慣習に従いながらも、最終的にウェントワースに告白するアンの自主的な姿は、現実的な条件を見落とさないのと同時に、個人の感情に従いながら生きる柔軟さを体現し、『説得』に描かれた新しい女性像だと言える。

本論では、『説得』を話法の観点からテキスト分析し、主人公であるアンの人物像と作品におけるフェミニズム的主張との関係性を明らかにした。結論として、感情をコントロールするアンの姿は作品で打ち出される新しい女性像であると指摘した。それは、当時女性に求められた行動様式に従うものであるものの、それをうまくすり抜けながら自らの意思と行動力により幸福な結婚を掴み取る女性像である。先行研究では十分に論じられていなかったアンの人物像の二面性における積極的な側面に注目し、『説得』に新たなフェミニズム的視点を見出した点に本稿の意義があるといえる。

『世界のかなたの森』における女性の衣服とウィリアム・モリスの思想
— 『ユートピアだより』 との比較から —

国際教養学部 教養学系

学籍番号 210165

氏名 千明 瑚海

指導教員 加藤 千博

ウィリアム・モリス(1834-1896)は文学的な側面ではユートピア文学で知られているが、ファンタジーである『世界のかなたの森』(1894)を晩年に執筆したことはあまり知られていない。彼は『ユートピアだより』において、特に女性の服装に関して重要な指摘をしており、彼の作品における登場人物の服装は、単なる装飾ではなく自身の思想が反映されたものだと思われる。しかし、『世界のかなたの森』においてモリスの衣服に関する思想がどのように反映されているかは十分に研究されていない。そこで本論文では、『世界のかなたの森』におけるモリスの衣服に関する思想を主題とし、本作品に反映されている衣服についてのモリスの考えを読み解き、モリスの思想の新たな一面を明らかにすることを目的とした。研究方法としては、『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』とを比較し、それぞれの女性キャラクターの衣服の特徴の共通点や相違点を分析する。

第1章では主に『世界のかなたの森』の作品分析を行った。まず、先行研究における『世界のかなたの森』に対する見方を確認した。そして、本作品の主要な女性キャラクターであるメイドと女王を、衣服の描写に注目して分析した。本作品はモリスの私生活との関連から逃避的なものとして見られる傾向がある一方で、彼のそのほかの活動に通じる価値意識を読み取ることのできる重要な作品であることを示した。また、女王とメイドが対照的な人物であり、女王は自身の権力の強さや地位を誇示するものとして衣服を身に着けている一方で、メイドは自らの意思で自由に衣服を選択する様子が描かれていることが明らかになった。

第2章では、衣服に着目して『ユートピアだより』の分析を行った。まず、19世紀において女性が服装を選ぶ際に、身分や道徳的な規範が重要な要素となっていたことを論じた。そして、『ユートピアだより』の全体においてそうした当時の状況が、否定的なものとして描かれていることを指摘した。そのうえで、本作品の主要な登場人物であるクレアラとエレンという二人の女性を、衣服に関する発言や描写に着目して分析した。クレアラは、自らの見た目が美しくあることを当然とする価値観を持っており、個人が身分に縛られずに衣服を選択できることを重視する人物であることを明らかにした。また、エレンについては19世紀の生活を否定的に見ており、経済状況に関係なく良質な服装をすることのできる22世

紀の社会を称賛する価値観を持つ人物であることを示した。加えて、エレンの服装は身体を軽やかにまとうものであり、19世紀の女性たちの服装とは対照的に描かれていることも指摘した。

第3章では、女性の衣服に対するモリスの思想を中心に分析した。最初に、1882年の講演におけるモリスの衣服についての発言を分析し、モリスは女性が自由に着るものを選択できることに価値を置いており、身体を歪め、動きを妨げるような服装には否定的であることが明らかになった。そして、このモリスの考えと19世紀後半の衣服改良の動きとの関連性について考察し、モリスは芸術活動を行う中で女性の服装のデザインに関心を持ち、同時代の動きを背景に当時の流行に対する批判的な見方を持つようになった可能性を示した。最後に、第1章と第2章の作品分析を踏まえて、『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』のそれぞれの女性キャラクターの比較を行った。そして両作品の共通点として、女性が自らの意思で衣服を選択することと、身体を軽やかにまとう簡素な服装が理想として描かれていることを明らかにした。『世界のかなたの森』ではメイドと女王という対照的なキャラクターの存在によって、『ユートピアだより』ではエレンとクレアラという未来社会に住む女性の発言や描写を通じて、それぞれの異なる形で女性にとっての理想的な衣服のありかたが示されている。またこれらの共通点は、モリスが衣服について重視していることと一致するものであることを指摘した。

以上のように、本論文ではウィリアム・モリスの思想を『世界のかなたの森』における女性キャラクターの衣服の描写を分析することによって明らかにしてきた。結論として、モリスは女性の衣服について、自らの意思で自由に決定できることと、シンプルで軽快な服装を理想としており、この考えは『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の二作品において、それぞれ異なる形で反映されている。『世界のかなたの森』ではメイドと女王という対極的な人物の描写から、『ユートピアだより』では、未来社会に住むエレンとクレアラという共通する価値観を持つ二人の女性の描写から読み取れると結論付けられる。

本論文では、女性キャラクターの衣服の描写に着目し、モリスの『世界のかなたの森』を『ユートピアだより』と比較して分析し、それぞれの共通点や相違点をもとにモリスの思想を明らかにした。先行研究では十分に研究されていなかった『世界のかなたの森』を登場人物の衣服に着目して分析したことに本論文の意義がある。本論文では『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の二作品に限定して分析をしているため、同時期に書かれた『世界の果ての泉』や『輝く平原の物語』といったモリスのほかの作品における女性の衣服の描写を分析することが、今後の研究課題である。

『ピーター・パンとウェンディ』における理想の女性像はどのように変化したかーディズニー映画「ピーター・パン」と「ピーター・パン&ウェンディ」を通してー

国際教養学部 教養学系

学籍番号 210191

氏名 中村 実優

指導教員 加藤 千博

児童文学『ピーター・パンとウェンディ』(Peter and Wendy, 1911) はイギリス人作家の J・M・バリー (James Matthew Barrie, 1860-1937) によって書かれたファンタジー作品である。この物語は繰り返し劇や映画としてメディア化されている。特に知名度が高いのはディズニーが 1953 年に発表したアニメ映画「ピーター・パン」であり、2023 年にディズニーは実写映画「ピーター・パン&ウェンディ」を発表した。原作小説や 1953 年版映画においてピーターに恋をし、母親のように生きたいと願ったウェンディは、2023 年版映画において自ら戦闘に挑み、成長することは冒険だとピーターに説く、まったく新しい少女に変化している。そこで本論では、フェミニズムの観点から原作小説における理想の女性像の描写の変化に着目することを主題とした。そして理想の女性像が 1953 年版映画と 2023 年版映画ではどのように描かれているかを追究し、2023 年版映画では原作小説でみられる性差別描写が解消されているといえるかを明らかにすることを本論の目的とした。

本論文ではまず、ヴィクトリア朝時代の伝統的価値観である家庭の天使について、先行研究を利用して整理し、それをもとに原作小説におけるダーリング夫人とウェンディの人物像を分析した。次に、1953 年版映画におけるダーリング夫人とウェンディの描写を分析し、原作小説との比較を行った。最後に 2023 年版映画におけるダーリング夫人とウェンディの分析を行い、1953 年版映画と比較した後にフェミニズム的価値について検討した。

第 1 章では原作小説について分析を行った。まずヴィクトリア朝の伝統的価値観である家庭の天使という、当時の中産階級における理想の女性像が原作小説のダーリング夫人とウェンディの人物像に反映されていることを、先行研究を使用して確認した。次にウェンディは家庭の天使ではないという先行研究に対し、彼女は原作小説において母性しか求められていないという根拠から、ウェンディは家庭の天使といえることを指摘した。最後に原作小説内のダーリング夫人とウェンディの人物像を分析し、ダーリング夫人については、家庭の天使として、また知識に乏しく感情的な人物として描かれていることが分かった。またウェンディについては、夫人と同様に家庭の天使として描かれていること、没个性的で母性だけが強調されていること、そして常に男性に守られる存在として描かれてい

ることを論じた。

第2章では1953年版映画におけるダーリング夫人とウェンディについて分析をし、原作小説との比較をした。ダーリング夫人は、原作小説との共通点として、家庭の天使として描かれていること、また愛情深い人物として描かれていることを示した。また原作小説に反映されていると考えられる理想の女性像であるヴィクトリア朝的価値観を引き継いでいると解釈できると論じた。相違点としては、1953年版映画では夫人に関する描写が少なく、知識に乏しく感情的な人物であるとは読み取れないことを示した。そしてウェンディは、原作小説との共通点として、常に男性に守られる存在として描かれていることを指摘した。相違点として、没個性的ではなく、ピーター・パンへの恋愛感情が強調されていることを示した。さらに1953年版映画でウェンディは家庭の天使としては描かれていないという解釈を論じた。そしてウェンディはネヴァーランドでの冒険を通して成長を受け入れる人物として描かれており、ここでの成長とは女性に求められる社会規範を受け入れて母親として生きる人生を選択することを意味していることを明らかにした。

第3章では2023年版映画におけるダーリング夫人とウェンディの人物像の分析をし、1953年版映画との比較を行った。ダーリング夫人については、共通点として愛情深い人物として描かれていることを示した。また相違点としてダーリング夫人は家庭の天使として描かれていないことを指摘した。そしてウェンディの人物像の相違点は、原作小説や1953年版映画に表れていた価値観を否定し、活発で積極的に行動する人物、ピーター・パンから独立している人物、加えて成長を受け入れる人物として描かれていることを指摘した。第2章でもウェンディは成長を受け入れる人物であると指摘したが成長の意味合いが異なり、2023年版映画におけるウェンディにとっての成長とは、自分の人生を自由に選択し日々新しいことに挑戦していくことであると論じた。そして2023年版映画のフェミニズム的価値として、それまでのステレオタイプから脱した新しいウェンディの人物像が描かれており、女性にとって将来の選択は限定されるものではなく自由なものであると論じた。また、2023年版映画における設定やストーリーの変更が性差別描写の解消につながることや、ウェンディの描写を通して新しい女性像が表されていることが2023年版映画のフェミニズム的価値であると示した。

本論文では、小説『ピーター・パンとウェンディ』、そして映画「ピーター・パン」、「ピーター・パン&ウェンディ」の3つの作品をフェミニズムの観点で分析した。結論として、原作小説に表れていた理想の女性像は、2023年版映画では描かれておらず、ウェンディは過去作品における女性像を脱した新しい女性として描かれていることを示した。そして2023年版映画における新しい女性像とは、選択を強いられることなく自由な人生を生きる人物であると論じた。2023年版映画をいち早く取り上げて研究していることに本論文の新規性があり、原作小説とディズニーの2つの映画を比較していることに意義があるといえよう。

近代以降の日本における消費文化としての紅茶流入と
その背景に関する考察
—英国式アフタヌーンティーに焦点を当てて—

国際教養学部 教養学系

学籍番号 210245

氏名 宮川 奈那美

指導教員 加藤 千博

現在の日本社会では、女性たちを中心に英国式のアフタヌーンティーが関心を集めている。イギリスで誕生したアフタヌーンティーは、午後にケーキやスコーン、サンドウィッチとともに紅茶を楽しむ文化であり、コミュニケーションの場としての役割を持つ。日本においては、2022年に「ユーキャン新語・流行語大賞」にアフタヌーンティー活動の略語である「ヌン活」がノミネートされ、アフタヌーンティーという文化が日本人の間で広く認知されることとなった。日本のホテルやカフェで提供される英国式アフタヌーンティーを見ると、本場の英国とは異なり、日本独自の文化に起因する要素を孕んでいると思われる。日本社会が英国式のアフタヌーンティーのどのような点に魅力を感じ、消費者に受容されるに至ったのだろうか。本論文は、近代以降の紅茶流入から日本でアフタヌーンティーが人気を確立するまでの歴史的、文化的背景の考察を主題とした。そして、英国と日本の茶文化に関連する先行研究を用いながら、日本のホテルなどが提供するアフタヌーンティーの事例を検討することで、アフタヌーンティーの人気の要因を解明し、両国の文化への理解を促進することが本論文の目的である。

第1章では、世界への茶の普及と英国と日本両国における茶文化の歴史や特徴を確認した。また、物質文化の英国式アフタヌーンティーと精神文化の茶道として捉え、両国の茶文化の比較を行った。英国式のアフタヌーンティーは砂糖の大量消費や植民地との関わり方という観点から奢侈品に価値を見出す文化であると指摘した。一方で、茶道はわび・さびの思想に見られる、質素なものに価値を見出す精神的文化としての側面が強いということを理解した。しかしながら、両文化は相反するものではなく、客人へのおもてなしの心遣いや道具への美意識などの共通点を持っていることで、日本社会が外来の英国式アフタヌーンティーを受け入れ、発展させる余地があったと論じた。

第2章では、近代以降の日本に紅茶文化が伝来した経緯と変容について整理した。明治時代までは紅茶は上流階級が特権的に摂取できる飲料であったが、1960年代からティーバッグやペットボトル入り紅茶が登場したことで庶民にも紅茶が普及したと考えられた。英国式アフタヌーンティーが日本のホテルやカフェで提供され始めるのは1980年代以後で

あり、異分野と融合することで日本独自のアフタヌーンティーとして成立していると指摘した。

第3章では、アフタヌーンティーと異分野との融合という観点から、高級ホテル、推し活、ラグジュアリーブランドの三つのアフタヌーンティーの例を取り上げ、消費者が感じている魅力に関して分析を行った。そして、高級ホテルに宿泊する、ラグジュアリーブランドの商品を購入するという行為よりも手軽に優雅な非日常空間を楽しめることがアフタヌーンティーの醍醐味として挙げられた。また、アフタヌーンティーのカスタマイズのしやすさが自分好みの世界観を作り上げられ、SNSで自分のライフスタイルをアピールできるということも消費者にとっての魅力であると考えられた。日本で流行しているアフタヌーンティーは、日常から逃避する優雅な時間としても、SNSで自分を表現する手段としても受容されていると指摘した。

日本社会で人気を博している英国式のアフタヌーンティーは異分野と融合し、独自の変容を遂げている。精神文化である茶道を古くから培ってきた日本であるが、高級ホテルなどはアフタヌーンティーの上品な雰囲気のアピールポイントとしていることから、現在日本で流行しているアフタヌーンティーは物質文化として捉えられる。しかし、日本のアフタヌーンティーは、英国の物質文化であるアフタヌーンティーに、茶道の構成要素である抹茶や和のテイストを加えるなど、精神文化のモチーフを部分的に使用することで異分野と融合した日本式のアフタヌーンティーが成立していると言えよう。物質文化の英国式アフタヌーンティーを真似るだけではなく、日本らしさを取り入れることで消費者のアフタヌーンティーの楽しみ方が多様化され日本社会で受容されているのである。

以上のように、本論文では近代以降の紅茶流入と歴史的、文化的背景に関して英国式のアフタヌーンティーに焦点を当てて分析を行った。その結論として、アフタヌーンティーが日本で受容された理由の一つに、茶道と英国式のアフタヌーンティーに共通点があり、外来の茶文化を醸成させる余地が日本に存在したことが挙げられると論じた。そして、アフタヌーンティーが日本で人気を博している要因には、アフタヌーンティーが非日常感を楽しめる優雅な消費文化として認識されている点や、SNSで自分の豪華なライフスタイルをアピールするために有用であるという点が関係していると結論づけた。また、高級ホテルや推し活といった物質文化的なアフタヌーンティーが見られるほか、精神文化の茶道に関連する抹茶など、和のモチーフが使用され、日本流のアレンジが加わることで消費者が親しみやすい商品になり得ていると導き出した。本論文は、日本社会が紅茶文化を受容する歴史を踏まえながら、具体的なアフタヌーンティーの事例とSNSや推し活の流行という文化的な観点を組み合わせて茶文化を検討したことに意義がある。